

第5章 周辺遺跡の概要

館跡の周辺には、縄文時代をはじめ、擦文から中・近世までの埋蔵文化財包蔵地が数多く所在する。なかには、史跡指定地に続くかと推される遺構の拡がりを確認できたものもあるが、館跡との関連が想定される埋蔵文化財包蔵地や周辺の分布調査の結果などについて、その概要を以下に記述する。

第1節 花沢館跡周辺

お浪沢A遺跡（埋蔵文化財包蔵地）

館跡北西の沢を一つ挟んで天の川に注ぐお浪沢川左岸の丘陵裾部に「お浪沢A遺跡」として知られる遺物包含地がある。縄文晩期と続縄文の恵山式土器が採集されていたほか、昭和33年頃、公営住宅建設時にアイヌ文化期のものと推される刀・小柄・鏝などの鉄製品を採集、同48年頃には江戸期の土葬墓（人骨・銅銭等）を確認している。

第2節 洲崎館跡周辺

1 北村地区【第25図参照】

当地区は洲崎館跡との位置関係から何らかの関連があると考えられるため、平成13年度に47カ所のテストピットによる試掘調査を行った。



第25図 北村地区 分布調査箇所 位置図

遺構は近現代以前の旧道の側溝跡とみられる柱穴？や浅い溝状遺構が確認された程度で、遺物は盛土や表土からの出土である。

通称「裏町」と呼ばれる第28調査区などでは、唐津のすり鉢や内野山窯産の銅緑釉皿など18世紀以降所産のもの、旧国道228号（町道北村内郷線）に沿う住宅地の南側では肥前系の碗・皿・瓶子などの陶磁器を検出したが、年代的には18世紀以降のものがほとんどである。

この調査で中世の遺物や遺構は確認できなかったことから、館跡の拡がりや、中世の遺物が発見されている国道228号に東面する住宅地付近が東限で、国道を越えて内陸部まで延びていないと推定した。

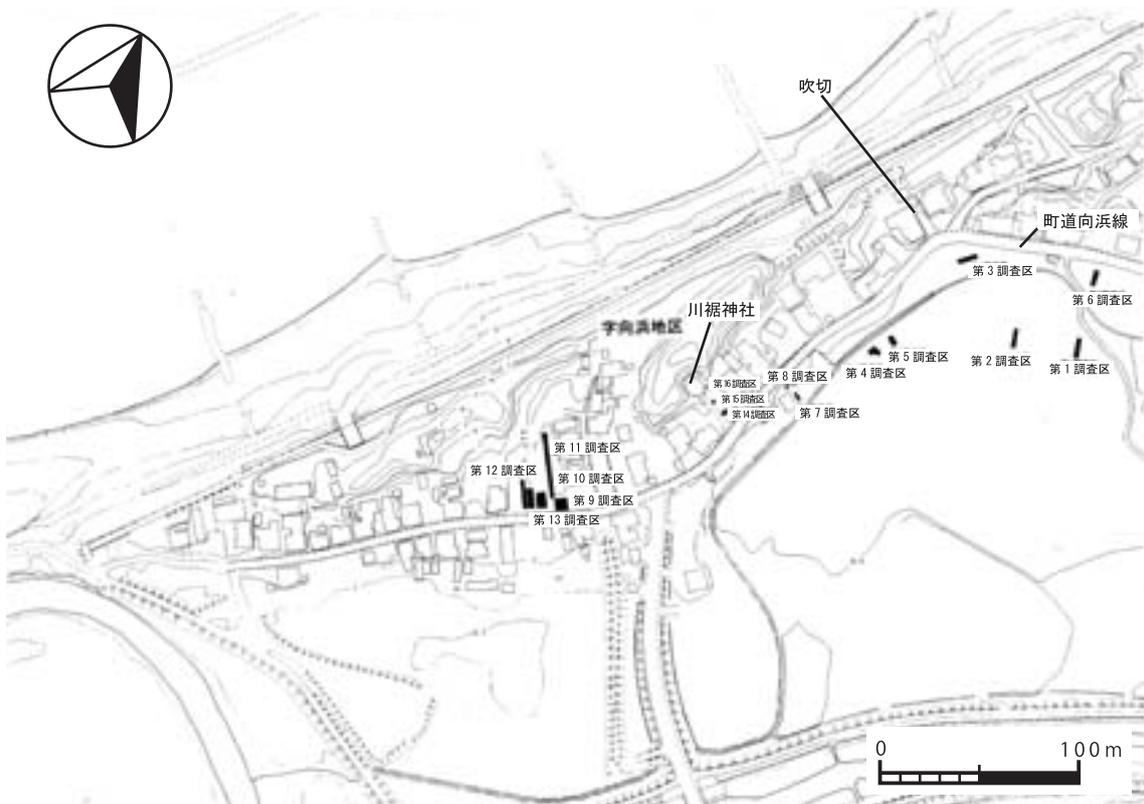
2 向浜地区【第26図参照】

「洲崎」は、洲が海中もしくは河中に長く突き出た地形を一般的に表す語であるので、洲崎館跡に接続する向浜集落がのっている砂洲を指しているものと想定し、洲崎館跡との関連性を確認するため、平成12年度に14箇所の特レンチまたはテストピットによる調査を行った。

館跡との関連が想定される遺物は、川裾神社境内地（第14調査区）で出土した白磁皿と、江戸期の船着き場・吹切に近接する旧目名川跡地（第3調査区）で出土した青磁碗の2点のみ突出して時代が古く、この辺りまで館の時代の土地利用が延びていく可能性がある。

第9～13調査区で19世紀後半以降の遺物が非常に多くなることから、この頃が向浜集落の盛期と思われる。

現在草地となっている旧目名川跡地の調査（第4、5調査区）では、駒ヶ岳d火山灰層（Ko-d、1640年降灰）までの深さが約1.6mで、近世初期以前の砂と粘土の互層も確認されていることから、この一帯は沼地あるいは一時期水流があったと考えられている。



第26図 向浜地区 分布調査箇所 位置図